

テーマ 「豊かな表現活動をめざした授業のあり方」

1 テーマ設定の理由

音楽の授業では、音楽の楽しさや喜びを味わわせ、音楽嫌いの子どもを生み出さないことを課題とし、子どもたちの個性や興味・関心に即した多様な音楽活動を心がけている。「自分の音楽性に気付き、そこから楽しく音楽に関わること、生きた音楽体験、自ら音楽することを持って自己表現をなしえるという体験を持つこと」、体験を通して得た感動や喜びが、生涯にわたって、音楽と関わり続ける原動力となり、その原動力が「豊かな心」につながるであろうと考える。音楽科の豊かな学びは、豊かな心を育てる音楽活動にある。そうした活動を取り入れた授業のあり方を音楽科として再考するため、このテーマを設定した。

2. 本年度の研究について

音楽科における「豊かな学び」とは、その大前提として、自分が関わった「音楽」が新たな自分の可能性を引き出すものであることを実感することであるととらえる。

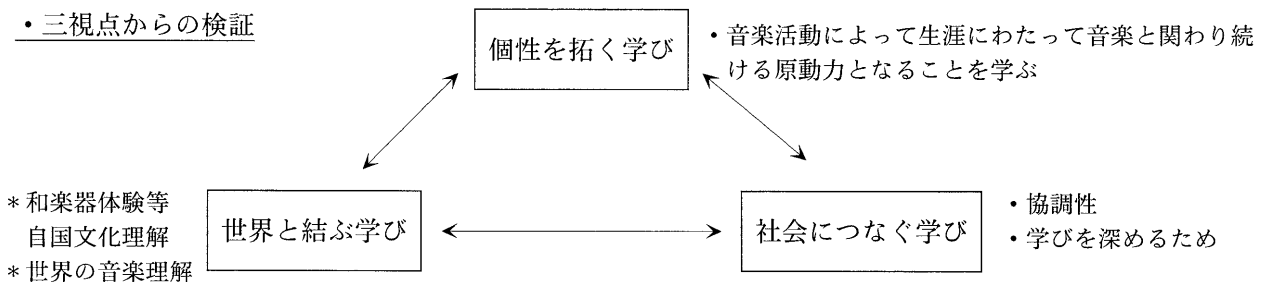
例えば、ひとつの歌を知ること、自分の思いが表現できることを知る、あるいは自分の感動した音楽をさらに追求することで、自分の知らなかった文化、歴史を知る。このようなことを通して、自己表現・文化理解・コミュニケーションのひとつの形態としての音楽を身につけさせることである。学校における学習としての音楽の取り組みは、一言で言えば、能動的に音楽に触れるということである。言い換えれば、表現手段としての音楽を身につけることである。知識・技能的なものを含めて、音楽が自らを表現する手段であることを学習を通して自覚させたい。少ない授業時間数の中で、様々なことに取り組みさせたいと考えている。そのために、一つ一つの具体的な課題を消化するという活動には陥ってはならない。

昨年度は、世界と結ぶ学び、個性を拓く学び、社会につなぐ学びに着目し、習得サイクルにおいては、音楽するための技術、曲に対する理解、表現活動といったことに個人の力を付ける支援を考えた。

また、探究サイクルにおいては、習得サイクルの成果に基づいて、学びを深める活動に取り組んだ。

少ない授業時間数の中で、様々なことに取り組みながら、学習の一つ一つが、具体的に課題を消化するという活動だけに陥らず、楽しみ、かつ音楽的な力が高まることを願っている。そして、これから生きていくうえで心の糧となるような取り組みの成果を上げさせ、今後も音楽を通して豊かな心を育むことにつなげたい。

・三視点からの検証



「個性を拓く学び」→自分の音楽活動（表現活動）の技術、知識、志向（思想）

「世界と結ぶ学び」→自分の知らない音楽活動、技術……認める

「社会につなぐ学び」→「個性」が「世界」と結びついて集団を構成していくこと

これらの三視点からその成果としては、・自分（個性）を相対的にとらえやすくなった。・自分の向上を身近なところで実感し、認められることで効力感を得る。・より幅広く、かつ、感動の実感ができた。ことがあげられる。しかし、課題として、その感動の根拠が曖昧になってはいないか、個に完全にフィードバックされたかどうかの検証ができていない。その感動が純粹に音楽体験によるものであるかどうか、というところまでいたっていないのが現状である。

そこで、今年度については、これらのことから、取り組みに必要なことは、新たな学習集団の形成をふまえて、今年、個々が身につけたもので、どのような学習集団をつくっていくか、これがひとつの課題である。その集団の目標として、より深まりを持ったものにしていくことを今後の取り組みの柱のひとつに考えたい。

(全体提案への関わりとして) ……個の学びと集団の学び

学習の取り組みのひとつとして、班による学習をしている。4人一組で10班。

学級単位で基本的なことを学習（指導を受ける）

↓

班の中で相互に評価し合い、優れた部分をまねあうことで高めあう。

↓

全体に戻って、いくつかの班が取り組みの成果を披露する。それを生徒と教師が評価する。

個人の学習・・・技能の高まりとその成果の実感

班の学習・・・個々の能力を正しく評価しあう。感想、意見を伝えあう。＝課題の発見1

全体の学習・・・基本的な事項の伝達 到達度の確認＝課題の発見2

音楽体験	①音楽に触れる	技能＝全体	感動＝個人
	②音楽を作る1・・・追体験＝模倣＝検証＝課題の発見＝再模倣：班		(楽譜を音楽として再生する＝技能的充足感の感動)
	③音楽を作る2・・・創造＝自己表現としての音楽：個人		(楽譜から音楽を生み出す＝表現的充足感の感動)
	④音楽を作る3・・・共同性＝感動の共有、技能のスタンダード化、共感の成立、表現(発信)の場の保証と表現(発信)の相互授与。		

①が学級単位での学習であり、②③④が班での学習の中核を担う。

①は主として技術的な分野における学びあいで、相互の課題に対する解決を協力しあう。ただし、これでは「上手な者が下手なものに教える」だけとなる。班を作り、その中で個々の目標を設定する際に②段階にとどまらず③段階を設定していなければ意味がない。

すなわち、「自分の音楽」を伝えることができているかどうかの視点を個々もつ必要があり、その能力を養っておく必要がある。その機会の中心は①の学級集団での学習において設定しているが、これは主として視点を与えることになる。(上手とはどういうことかの実例に触れる、演奏される音楽に触れることでの感動を漠然とでも与える)

そして、授業という限られた時間設定の中で「表現する」時間と場の確保として班が機能することが大切である。表現をすること、表現を日の当たりにすることで得られる感動が、より大きな学習(意欲の昂進、より高度な技能や様々な技能の希求、感動に気づく感受性の高まり、)につながる可能性をもたらすところにこの班学習の意味づけがなされているのである。

3. 成果と課題

今年度の音楽科では、個と集団の関わりをもってどんな学習集団を作り上げるか、と言うところに重点を置いた。個人での学習、班学習、全体学習として、個人の学習では、技能の高まり、その成果を実感する。班学習では、ここの能力を正しく評価する力を養なう。全体学習では、基本的な事項の伝達や到達度の確認を行う。この学習では、ほぼ習得サイクルでの学びとなる。

毎回の授業で、学習課題を掲げ、その課題をうけて、個人課題を持つ。班学習になると、さらに班目標ができる。

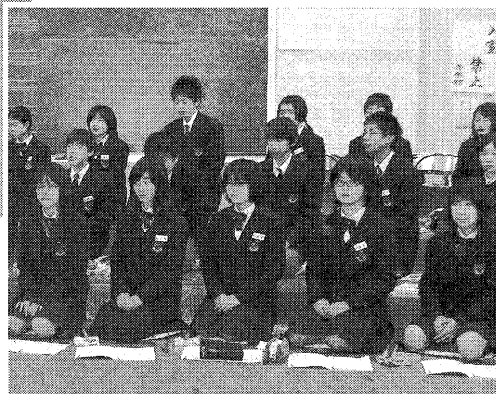
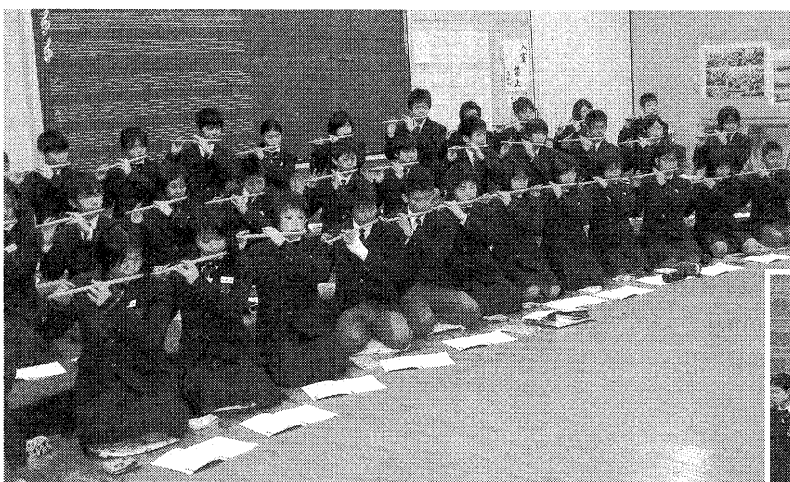
この課題で、個と集団がより高いレベルにステップアップするために、授業の始めに一回目の発表をする。その発表を認識、検証し、同じ授業時間に再度発表する。この形式で授業を行うと、子どもたち自身の五感で技能の高まりや感受の高まりを実感することができる。この中では、探究サイクルの学習が成り立つ。

限られた時間のなかで、「表現する」「音楽を感じる」という学びが学習集団のなかに息づいてきたものと思われる。

学習指導要領が改善される。共通事項とともに、創作では、音を音楽へと構成する体験の重視、鑑賞では、音楽に関する言葉等を用いて根拠を持って批評する力の育成、和楽器の表現や我が国の伝統的な歌唱の指導、音楽と生活や社会との関わりを実感することなどを重視している。

(解説 かわる学習指導要領 ここがポイント 大熊 信彦 参照)

思考・判断する力、音楽的な言語能力の育成が求められている。今後、これらを意識し、授業改善の視点として、音楽によって、喚起されるイメージや感情に着目すること、言語の活用、他者との伝え合い・共感などを大切にする指導の工夫を試みたい。



① 題材 ～篠 笛～

② 題材について

音楽科における「豊かな学び」とは、その大前提として、自分が関わった「音楽」が新たな自分の可能性を引き出すものであることを実感することであるととらえる。例えば、ひとつの歌を知ること、自分の思いが表現できることを知る、あるいは自分の感動した音楽をさらに追求することで、自分の知らなかった文化、歴史を知る。このようなことを通して、自己表現・文化理解・コミュニケーションのひとつの形態としての音楽を身につけさせることである。

学校における学習としての音楽の取り組みは、一言で言えば、能動的に音楽に触れるということである。言い換えれば、表現手段としての音楽を身につけることである。知識・技能的なものを含めて、音楽が自らを表現する手段であることを学習を通して自覚させたい。

今年度から、子どもたち全員に教材として「篠笛」をもたせた。ねらいは、学習指導要領との関連もあるが、文化理解のための和楽器の演奏である。子どもたちは、メディアを通じて耳にすることはあっても日常生活の中で我が国の伝統的な音楽に接する機会はあまりない。そこで、音楽の授業においてその機会を持ち、日本の伝統的な音楽の特徴や魅力があることを発見し、日本の音楽に対する興味・関心を持つことをねらいとしている。国際化が進む中、我が国の国民性を大切に、音色等からなる日本音楽のすばらしさを世界に誇れる人に育ててほしいと願っている。1年生では、篠笛を実際に演奏し、特徴を感じ取らせることにより、その魅力を味わわせるところから、イメージを音と結びつけたり、身近な曲を吹くことで意識をもたせたいと考えている。篠笛は、言葉がそのまま音になる。その点で、親しみやすく易しい。また、調子も様々な高さのものがあり、今扱っている七本調子は子どもの声に合わせた音でつくられており、学校教材としても扱いやすく、一人ひとりが自分の楽器を持って学ぶことができる。また、和楽器として同じスタートラインにたち、学習をはじめることができる。基本奏法の定着として、目的は篠笛の実習体験による日本音楽の魅力の発見などにあるが、演奏に必要な技術が身に付いていなければ、演奏を楽しむことも、楽曲の味わいを感じることもできないであろう。器楽演奏においては、初歩段階でしっかりと身につけておかなければならない基礎知識や基礎動作がある。これをおろそかにしてしまうと、その後の発展はむずかしい。しかし、中学校の授業時数は限られている。時間の範囲で絞り込んだ内容をより効率的に指導しなければならない。そのため、授業形態を個人練習と班学習によるものとした。しっかりと身につけさせたい基礎事項は、班で確認しながら進め、さらに今回はふり返りに重きを置く、ということによって基礎技術の定着をねらうこととした。

習得サイクルにおいては、与えられた課題に対して、次の三点を学ぶ。

- ① できるだけ聴いた音に近づくように吹く。そのための技術の確認。(習得)
- ② その曲の背景にある文化(原語の響きや風土、作詞の背景)について調べ、国有文化としての曲に対する理解を深める。
- ③ ①②を統合して、篠笛の表現に取り組む。

探究サイクルにおいては、習得サイクル成果に基づいて、学びを深めるために、次の活動を行う。

- ① 自分たちの学んだことを伝え理解させることを試みる。(発信)
- ② その課程において、自分たちの成果を検証する。十分に満足のできる点、不十分である点を知り、そのことから課題に対する取り組みをさらに深める。(追究)

豊かな学びを子どもたちと共に音楽の授業を通して感じ、さらにこれからの子どもたちの生活の中に音楽が生きて心を耕す糧になることを願っている。音楽によって自己の内に生じたものの共感の成立が、音楽科におけるコミュニケーションととらえているが、その媒体となるのが、言語（理論性）・身体による表現（技術、感性）である。言語は、響きや旋律、律動といった具体的な刺激を抽象化することで、技能が伴わずともその特性や内容を共有することを可能にする反面、あくまで抽象化された情報が具体化することはない。技術・技能は、音楽そのものを表現することで、思いの共有を可能にする。ただ、そこには求められることをすべて表現するという技能が伴わない限り、のぞむ形での共感を得られない。互いに補完するところがあるとはいえ、言語は理解の共有、技術は感動（心の動き）の共感を支えるものであり、この両者のバランスのとれた習得と、そのための経験の機会こそ、音楽教育を通して求めていくべきであると考えている。

③ 学習目標と評価規準

学習の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・篠笛の演奏により日本音楽の魅力味わう。篠笛の奏法の特徴を理解しよう。 ・表現するための音楽的な基礎・基本を体得し、豊かに表現できる方法を探る ・演奏を聴き合うことによって、お互いを高め、さらに次への表現へと高めるようにする
評価規準	
音楽への関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ①進んで活動に取り組み、仲間と一緒に音楽を楽しもうとしている。 ②我が国の音楽や楽器に関心を持ち、意欲的に演奏、表現しようとしている。 ③より高い目標を持ち、学習に取り組む。
音楽的な感受や表現の能力	<ul style="list-style-type: none"> ①篠笛の響きや特徴などを感じ取ろうとしている。 ②感じたことを発表し、表現を工夫する。
表現の技能	<ul style="list-style-type: none"> ①篠笛の特徴を理解し、正しい奏法で演奏するための技能を身につけている。 ②お互いを聴き合いながらよりよい表現を求めて演奏することができる。
鑑賞の能力	<ul style="list-style-type: none"> ①音色や奏法等様々な構成要素の働きや効果と、楽曲の雰囲気や曲想のかかわりを意識して聴き取ろうとしている。 ②我が国の音楽、郷土の伝統音楽の特徴を意識して聴き取ろうとしている。

（学習活動における評価規準）

音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能	鑑賞の能力
<ul style="list-style-type: none"> ・篠笛に対して興味・関心を持って取り組むことができる。 ・日本の音楽（能・歌舞伎）の特徴を知り、活動に意欲的に取り入れようとしている。 ・いろんな曲を篠笛で演奏することに意欲的である。 ・自己の学びをより理解しようとしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・篠笛の響きを感じ取っている。 ・基礎事項について理解できる。 ・お互いの演奏を聴取しあい、数字譜どおりに演奏されているか、イメージする音になっているかを感じ取る。 ・日本の伝統的な音楽の特徴を感じ取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> （全時） ・基本的な奏法で、曲を演奏するための技能を身につけている。 作法 （姿勢） （口、手の使い方） （腕の使い方等） 音色 （ふき方） （息の入れ方）等 	<ul style="list-style-type: none"> ・音色や奏法に関心を持ち、その特徴を理解することができる。 ・我が国の音楽や伝統音楽の様々な特色や特徴を聴き取ることができる。

④ 学習計画 (45モジュール 1モジュール=15分)

学習過程	学習の中心	教師の働きかけと学びのサイクルについて
篠笛について理解する。	<ul style="list-style-type: none"> 篠笛について 歴史、構造（楽器の各部の名称） 作法を学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の音楽に関心を持たせる。 篠笛について理解する。（習得） 作法や奏法を理解する。（習得）
篠笛をふく。	<ul style="list-style-type: none"> 篠笛の音を出す。 動作、作法 口のあて方 数字譜と手穴の関係について知る。 ゲストティーチャーによる演奏を聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> 姿勢や音に視点を置き、豊かな音だしができるようにする。（習得） 音色を感じ取る。 班学習によって学習をふり返る。（習得・探究） 積極的に話し合いに参加させる。
練習曲をふく。 (本時) ふき方に気を付けて篠笛の響きを感じ取る。	<ul style="list-style-type: none"> 篠笛をふく。 テキストにそって練習。 口の形 ふきかた 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な作立法や奏法を確認する。（習得） 意欲的に活動する。 視聴しながら響きを感じ取らせる。 豊かな音を奏でることに関心を持つ。（探究） 楽曲が持っている音楽的な特徴（音の間、旋律）を感じ取らせる。（探究）
合奏する。	<ul style="list-style-type: none"> 篠笛の練習。 鳴り物の練習。 日本の民謡、簡単な曲を練習する。 <p>独奏とお互いの演奏の感受。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 様々な特徴をとらえて、表現する。（探究） 演奏を通して仲間意識を強める。 観点にそって記述させる。

⑤ 本時の目標 付評価基準表

- 篠笛の響きを感じながらふく。（関心・意欲・態度）（感受）
- 既習事項を見直し、自己の学びをふり返る。（関心・意欲・態度）（表現の技能）
- 模範演奏を聴き、自分の音色を近づける。（鑑賞）

関心・意欲・態度	意欲的に活動に取り組む。 篠笛を演奏することに関心を持っている。 積極的に教えようとしている。	班での学習と全体の活動に参加している。 自分の曲を練習している。 学びのふり返りをしている。	自己評価 相互評価 教師の観察
表現の感受・技能	音楽的に表現を工夫している。 表現にふくらみを感じられる。	表現を工夫しようとする。	自己評価 相互評価
鑑賞の能力	音色や奏法の特徴を聴き取る。	めざす音色を聴き取ろうとしている。	

⑥ 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援	準 備 ・ 資 料
<ul style="list-style-type: none"> ○あいさつする。 ○既習事項を確認する。(おさらい) ○「篠笛」を演奏する。 ○本時の学習内容について、目当てを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・班で今まで学んだことを伝える ・自分の学びをふり返り、他者に伝達する。 ○それぞれ練習した曲を演奏する。 ○自己評価（成果と課題を把握） ○友達評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・作法の確認をする。 ・活動の心構え、準備をする。 意識する 篠笛の響き（和）を感じる ・今までの学習内容をここに想起するだけではなく、全体的な流れをとらえるようにする。 ・自己の学びをふり返り、確実に自分の力をつけることができるようにする。 ・ねらいを持って活動にあたるようにする。 ・練習の過程を見て、少しだけでも発表できるようにする。 ・活動のふり返りを記述させる 	<p>ワークシート</p> <p>相互評価 自己評価</p>

⑦ 結果と考察

和楽器の表現活動を授業に取り入れる。しかも、子どもたちが抵抗を持たず、準備に時間がかからない等、考えを念頭に置き、「篠笛」の学習に取り組んだ。

- ・授業をうける子どもたちの姿勢に変化が見られるようになった。
- ・しっかりと地に足がついた授業ができる。
- ・作法を学ぶことによって、行儀がよくなった。
- ・学習に一人ひとりが自ら参加している。(自分が課題を持って、ステップアップにのぞむこと)
- ・音楽の持つ流れを感じる事ができている。

上記の五点が授業を参観していただいた先生方の感想である。

これを検証してみると、まず、子どもたちが「篠笛」にかなり興味を持ち、親しみを持って、学習に取り組んでいるということである。今までに経験したことのない楽器であること、学習のスタートがみな同じところから始めたことにもある。そして、日本の持つ風習いわゆるお行儀、お作法が和楽器ということで、きちりしなければならぬと子どもたちは自然に初歩段階で基礎動作を学ぶことができたということにもある。作法ができてくると、授業にのぞむ姿勢に必然的に落ち着きがでる。

この基礎動作を学ぶ段階にかなり力を入れた。「聴く」という活動にも力を入れた。

これは、習得サイクルにおいて取り組んだ活動である。



さらに学びを高め、深めるために班学習を取り入れたことも有効であった。自分の学びを伝え、理解し、そして、その過程において、成果を子どもたちどうして検証する。この学習が、課題を持ち、学習に取り組む、ステップアップにつながったと考える。この段階の活動が探究サイクルにおいた学習といえよう。

音楽の流れについては、「篠笛」は言葉がそのまま音になる、ということを感じたからであろう。心で奏でようとしなければ、篠笛の音は伝わらない、と子どもたちの感想にある。教師の意図する部分を理解できつつあるのではないか、と思う。

これからの「篠笛」の活動においては、さらにたくさんの曲をこなし、鳴り物を入れて合奏へと発展させていくが、

- ・背景にある文化
- ・伝統音楽のよさや美しさ

これらのことを充実させた授業の展開を考えなければならない。

また、学習指導要領改善の具体的事項において、伝統的な歌唱の指導も提示されているように、言葉が音になる、それを歌うことができることを授業の活動に取り入れていこうと考えている。